



相ノ木っ子だより

令和元年度
学校だより
7 月 号
上市町立相ノ木小学校

お年寄りの方とのふれ合いを通して

毎年6・7月に、子供たちがお年寄りの方々と交流する機会があります。2年生の敬老会学習発表や、5年生のグループホーム逢の希訪問、こんにちは訪問です。今年度も、2年生が歌や踊りを披露したり、5年生がお年寄りの方と一緒に七夕の短冊づくりをしたり、独り暮らしのお年寄りの方に花鉢のプレゼントやけん玉の披露をしたりしました。お年寄りの方々は、子供たちがやってくるのをとても楽しみにしていて、子供たちの元気な姿を見て、とても素敵な笑顔になり、涙を流して喜んでくださる方もおられます。それだけ、お年寄りの方々にとって子供たちの姿は生きる力であり、元気の源となっています。今年も、たくさんのお年寄りの方が「子供たちから元気をもらった」「来年もぜひ来てほしい」とうれしそうにしていらっしやいました。子供たちが「地域の宝」であることを実感し、今後も続けていかなければならない大事な活動であることを再認識しました。

一方子供たちは、そんなお年寄りの方の様子を見て、うれしそうに、そして少しはずかしそうにしています。前もって接し方を考えたり想像したりしてはいるのですが、実際にお年寄りの方を目の前にすると、最初のうちは戸惑ったり、緊張したりする姿が見られます。でも、共に活動したり会話したりする中で、少しずつ戸惑いや緊張がなくなってきた、自信をもって優しく接するようになってきます。これらの活動は、地域の行事への参加や総合的な学習の時間の一環であり、普段高齢者の方と接する機会のない子供たちにとっては、地域のお年寄りの方とふれ合える場になります。そして、福祉とは何か、人に優しくすることとはどんなことなのかを考えたり、体感したりする貴重な学びを行っているのです。

それにしても、よく考えると、すごいことです。大人のわたしたちも、高齢者の方を目の前にすると優しい言動をとりますが、なかなか会話が続かなかったり、こちらが時間をもてあましたりするものです。ですが、子供たちは活動時間いっぱい、優しさやていねいさをもって高齢者の方と接しています。では、子供たちはどんな気持ちでお年寄りの方に優しく接しているのでしょうか。優しい行為はどんな思いから生まれるものなのでしょうか。作家の浅田次郎氏は、次のように言っています。

老人は体が弱いから席を譲るのではなく、
わたしたちの生活を築いてくれた先輩だから、
それに感謝して席を譲るのです。



浅田さんは、高齢者の方は単に体が弱いから優しくしてあげる（哀れんで思いやる）のではなく、高齢者の方が今をつくり上げてきた人生の先輩であることに尊敬の念をもって優しくする（感謝の気持ちで思いやる）ことを願っています。また、AKB48のプロデューサーであり、作詞家の秋元康氏は、次のように言っています。

ほんとうのやさしさとは、
自分から親切にしてあげることでなく、
どんなときにも、
どんな人にもやさしい対応ができるということです。



秋元さんは、「席を譲る」「重い荷物を持ってあげる」などの「何かしてあげる」のは、優しさの押し売りになってしまうか危惧しています。そして、本当の優しさとは、「押しの優しさ」ではなく「受けの優しさ」、「何かをしてあげる優しさ」ではなく無条件な「受け止めてあげる（許す）優しさ」であると言っています。

そう考えると、優しい行為に向かう気持ちを見つめることが重要になってくるのではないのでしょうか。自分の優しさには、もしかしたら「優しくしてもらいたいから優しくする」「こんなことをする自分は何て優しいんだろう」といった見返りや自己満足があるのかもしれませんが。もちろん、優しくないよりは、優しい方がいいに決まっています。でも、自分は相手のことをどう考えているのか、自分の心に今どんなことがあるのかを確認することも必要なのかもしれませんが。子供たちには少し難しいことかもしれませんが、自分の行為と心を見つめていくことが、今後の一人一人の人との関わりや倫理観に影響を与えていくのではないかと考えます。そして、自分のよさや弱さを認めながら、真の優しさを追求していこうとする、よりよい人間になっていこうとする子供たちであってほしいものです。



ルールは何のため？ 自由とは？

「プールサイドは歩こう」「プールの中には静かに入ろう(とびこまない)」「準備体操をしっかりしよう」…

先日、晴天の下、プール開きを行いました。プールに入る際には、自分や友達の命や安全のために、守らなければならないルールがあります。体育委員会の子供たちは、上記のような「プールを使用するときの7つの約束」を発表し、全校にそのことを訴えました。その日早速プールに入り、気持ちよく泳いだり、水遊びしたりした学年もありました。今後の水泳の授業、夏休み中のプール開放を、安全に、そして思う存分子供たちに楽しんでほしいと願います。

プール開きでの子供たちの様子を眺めていて、ふと教養講座での講演が思い起こされました。とやま被害者支援センターの講師高倉年美さんによるお話を、保護者の方々、5・6年生と聞きました。飲酒ひき逃げ事故に遭い、2歳の長女と妊娠7か月の次男を亡くされたご自身のつらい体験から、わたしたちに3つの大切なこと(ルールを守ること、反省をすること、失われた命は絶対もどらないこと)を訴えられました。普段高倉さんは、中高生や大人に向けて講演されることが多く、小学生に向けて話すことは初めてだったため、少々苦勞されていました。子供たちに、話の難しさを気遣い、想像力をもって聴いてほしいとおっしゃりながら、熱意あるお話をされました。

子供たちは真剣に聞いていましたし、特に事故に遭われた時の様子等を聞く際は、しーんとした雰囲気がありました。高倉さんの遺族としての辛さや悲しみ、命を大切にしてほしいという思いは、子供たちに十分伝わっていました。しかし、その切実感子供たちには少々難しいものだったかもしれません。それは、我々大人も同じだったと思います。高倉さんの思いというものは、体験した者しか分かり得ないですし、どうしても他人事として捉えている自分がいたように感じます。

人間は弱いものです。これだけ世の中で不条理な事件・事故が起きていて、自分の身は自分で守らなければならないはずなのに、その立場になってみないと、生きていることへの感謝、自分や友達の命を守る強い決意を痛感することはできません。「自分には起こらないだろう」「きっと大丈夫」そんな思いを抱いている自分に気付かれます。また、「ルールなんてめんどくさい」「そんなものに縛られたくない」と自由を主張しがちで、人の目が無ければ、平気でルールを破ってしまうこともあります。

アメリカの生理学博士ローラ・シュレッシングガーは、次のように言っています。

自由とは、他者に敬意を払い、なおかつ自分を大事にするバランス感覚あってこそそのものだ。

また、哲学者イマヌエル・カントも、「実践理性批判」の中で、次のように言っています。

**自由とは、もろもろの拘束的規律から免れていることではなく、
道徳的意志がみずから課する規律、つまり自律を意味するものである。**



二人とも、他者や自分を大事にし、自分の中にきちんとルールづくりを行うことが、人間の真の自由だと言っています。そのためには、いろいろな状況や人の気持ちを想像することが大事であり、自分の言動を常に振り返ることが必要です。ルールと向き合い、自分の規則をしっかりとつくり、「ルールを守った方がよい」ではなく、「ルールは守らなければならない」と行動していくことこそが、その人の自由、自律であり、生き方そのものになると考えます。子供たちには、そんな想像力、自己を見つめる姿勢、力強い行動力を培ってほしいです。



行事予定(7月中旬～9月中旬)

7月18日(木)	健康・運動能力向上支援事業(1・2年)	8月22日(木)	1年・2年・あすなろ級登校日
22日(月)	地区児童会	25日(日)	親子奉仕活動
	こども110番の家訪問	9月2日(月)	第2学期始業式
	P T A夜間巡回開始(～8/30)		P T A全体理事会
24日(水)	第1学期終業式	9日(月)	6年ふるさと学習
25日(木)	夏季休業開始	11日(水)	運動会予行練習
26日(金)	立山登山(6年)	14日(土)	秋季大運動会
8月13日(火)	学校閉庁日(～8/16)	15日(日)	運動会予備日
20日(火)	5年登校日	17日(火)	振替休業日
21日(水)	3年・4年・6年・つばめ級登校日		

